2017年10月15日発行（毎月2回1日・15日発行）10月2日発売 第21巻19号（通巻438号）
1997年3月10日第三種郵便物認可

pen
with New Attitude

10/15
2017 No.438
特別定価 680 yen

いまならどちらを選びますか？
ちょっと古いクルマ、長く愛せる新車。

PARIS

ヨルゴ・トゥルパス Yorgo Tloupas | HONDA PRELUDE 1981年式 ホンダ・プレリュード

最新のクルマを知り尽くした男が選ぶ、古きよき日本車。

バイクポロ愛好家で4台の自転車を所有。毎日の移動手段は自転車だというヨルゴ・トゥルパス。『ルイ・ヴィトン・マガジン』『ヴァニティ・フェア』誌のアートディレクター、ブランディングや広告も手がける多才なデザイナーであり、スケボーからヨットまで乗り物を新たな視点で捉えた『インターセクション』フランス版の創刊編集長だ。仕事上、最新のクルマを運転する機会には事欠かない彼だが、愛車は1981年式のホンダ・プレリュード。初めて買ったクルマは5代目シビック、次はS2000。愛車は代々ホンダだった。

子どもの頃から、父親の故郷ギリシャで夏を過ごしてきた。「ギリシャには日本車が多い。古い日本車が好きなのは、夏休みの思い出のせいかもしれない」と笑う。70年代、カーデザインは国ごとに特徴があった。「日本車はキュートでぎこちない感じ。カーデザイナーがいなかった時代、突然いいデザインが出たり、逆もあったり」と、ヨルゴは解説する。

プレリュードとの出合いは7年前に遡る。古い日本車を探してインターネットで発見、ひと目で気に入った。「フォード・マスタングやトリノなどアメリカ車の縮小版みたいなかたち。運転すると静かで優しい。誰ももっていない、稀少性も魅力のひとつですね」

いまどきのパリジャンにとって、クルマは交通手段ではなく、喜びでありレジャー。必要だからではなく、好きだから乗るクルマが求められる。「クルマはインテリアやオブジェと同じ。新車は便利で性能もいいが、美しさでは古いものにかないませんね」

海外でも人気が高かったプレリュードのフランス仕様車。表示に使われたフランス語がこなれていない点も愛敬があって気に入っている。ハンドルのロゴも、いまとはちょっと違うデザインだ。

「仕事で運転する最新モデルとは飛行機とクルマくらい違う」と笑うヨルゴ。とはいえ購入以来、故障知らずの性能のよさには大満足だという。アナログな計器類も愛すべきディテール。

メタルの縁取りもレトロ感がある。かっちりしたテールライトの横には、プレリュードのロゴが。現在もマニュアル車が主流のフランスで、「ホンダマチック」というAT車というのも意外。

クルマ選びの基準は、美しさが自分の好みに合うこと。ナンバープレートも、クルマのスタイルに合わせたクラシックカー仕様の黒で誂えた。7年間で、同じプレリュードに出合ったのは一度だけという、レアな面も自慢。週末にドーヴィルに出かけるなど、200km以内の旅で愛用している。